

11-4 ジョッキ形土器の分類と構造

九州地方の土器の中に「コップ形土器」あるいは「ジョッキ形土器」と呼ばれる、特異な土器群がある。その名前のとおり、ジョッキにそっくりである。

この土器が弥生土器に属することは古くから知られていた。梅原末治は、坂本經堯蒐集資料の同類の土器に注目して、3個体の資料を学会に報告し、形態の類似から黒陶との関連を指摘した〔梅原 1958〕。大分県国東町安国寺遺跡においてはジョッキ形木器が出土したが、その考察を担当した乙益重隆によって「ジョッキ形土器」の年代と性格が論じられた〔乙益 1958〕。乙益は、ジョッキ形土器の年代を「安国寺式や、九州の伊左座式（高三瀬式ともいう）と時間的に近い関係にある」とし、その性格は「弥生文化の後期に現れる地域的な特徴ともいべきであろう」と位置付けた。緒方勉は、蒐集資料のうち主に「ジョッキ形土器」を紹介した中で、陣笠状柱頭の把手を有する「ジョッキ形土器」を初出している〔緒方 1984〕。緒方は、その系譜について朝鮮、中国の類例に言及し、彼地の影響を考慮できるとした。島津義昭は、新資料を紹介し、「ジョッキ形土器」の型式分類、出土地名表の作成、その分布の検討、年代の比定を行うと共に、その系譜については韓国南部地方の銅剣文化期の漆器に注意を払うべき点を述べた〔島津 1990〕。

既往調査におけるジョッキ形土器の出土量は、熊本県山鹿市の方保田東原遺跡の20個体以上が最多である〔中村 1982〕。今回、二子塚遺跡では108個体のジョッキ形土器が出土し、既往調査例を大きく上回った。

また、ジョッキ形土器の型式においても、既知の型式の多くが含まれ、多彩な内容を示している。

1 ジョッキ形土器の分類

島津は、ジョッキ形土器を大小の3種に分類した〔島津 1990〕。高さ10cm未満のものを小型、15cm以上のものを大型とし、両者の中間である10cm以上15cm未満のものを中型としたのである。次に、把手の形状から帯状把手、陣笠状の柱頭をもつ把手、断面円形の把手に分かち、それぞれにI、II、IIIの名称を与えた。最後に、ジョッキ形土器の紋様に着目し、無紋、櫛描波状紋、篦描重弧紋、平行沈線による区画帶内に櫛状篦による斜めの刺突紋をもつものに分かち、それぞれにa、b、c、dの名称を与えている。島津は、以上3種の分類項目を準備したものの、資料的制約から法量による分類は捨象し、把手の形状と紋様の組合せによる分類項目を用いている。

ここでは、上記の分類に加え、以下の分類項目を追加する。これは、上記分類に留まれば出土遺物の大半がIa類となり、Ic類が2点、II、III類が各1点に止まるため、遺物の記述には適さないからである。したがって、主に帯状把手を有し無紋であるジョッキ形土器Ia類を細分し、記述することを目的とした。

まず、法量による分類を行う。ジョッキ形土器を、島津が示した法量における大小の3種に分かち、それぞれ大型、中型、小型の記述を用いる。

次に、新たな要素としてジョッキ形土器の底部形状を分類項目に加える。底部が上げ底を呈するもの、平底を呈するもの、丸底を呈するものに分かち、それぞれ上底、平底、丸底の記述を用いる。

把手形状	I類	帯状把手
	II類	陣笠状の柱頭をもつ把手
	III類	断面円形の把手
体部紋様	a類	無紋
	b類	櫛描波状紋
	c類	篦描重弧紋
	d類	平行沈線による区画帶内に櫛状篦による斜めの刺突紋
法量		大型
		中型
		小型
底部形状		上底
		平底
		丸底

以上、把手形状、体部紋様といった島津の分類項目に、法量、底部形状の項目を加えた上記の分類項目を用いる。

2 二子塚遺跡のジョッキ形土器

二子塚遺跡から出土したジョッキ形土器は108個体を数える。315、340、464～468、471～475、477～483、485～491、771～782、784～814、816～825、827～831、921、924、1385、2184～2204はジョッキ形土器である。

315、340、465～468、471～475、477～489、771～776、778、780～782、795、816～825、827、828、831、921、924、1385、2184～2192、2194、2195、2197、2198、2200～2204の59個体は住居址(SB)から、464、479～483、485～488、490、491、777、779、784～794、796～814、829、830、2196の47個体は環壕(SV)から、2199、2193の2個体は包含層から出土した。

なお、ジョッキ形土器の実測図はすべて本節に掲載し、921、924、1385の実測図は各出土住居の弥生土器実測図にも重複して掲載している。

2-1 I類

帯状把手を有するジョッキ形土器である。

無紋のIa類が104個体出土し、櫛描波状紋を施すIb類、篦描重弧紋を施すIc類、刺突紋を施すId類は出土していない。

Ia類 帯状把手を有し、無紋のジョッキ形土器である。口縁部径と底部径はほぼ等しく、体部中位が緩やかに括れる。口唇部は丸く收め、通用は1把手を備える。胎土には精製された粘土が使用され、砂粒はほとんど含まない。土器の調整には、細かくしかも浅いハケメが用いられるが、外面にナデを加える例もある。色調は灰白色から淡黄色を呈し、焼成は堅緻である。

Ia類小型 ジョッキ形土器Ia類のうち、高さ10cm未満のものである。底径が、後述の中型と比して大差のない大きさのものと、より小径のものがある。底径が中型と同規模のものは、体部中位の括れが中型と比してより緩やかであり、底径がより小径のものは体部が直立し、ほとんど括れをも

たないようになる。468、477、483、485、785、1385、は平底、474は丸底、784、806、2186は底部形態が不明である。

Ia類中型 ジョッキ形土器Ia類のうち、高さ10cm以上15cm未満のものである。底部が上げ底のものは、底面と体部との接合面が丸みをもち、その屈曲部の稜線は底部より2mm程上にくる場合が多い。底面は中心部に向かって3～5mm程上げ底となる。464、771、818、924、2188、2190が該当すると考えられる。底部が丸底のものは、底面と体部との接合面が丸みをもち、その屈曲部の稜線は底部より5mm程上にくる場合が多い。底面は中心部に向かい3mm程下がる。なお、破片では認識が困難である。315、471、822、2194が該当すると考えられる。底部が平底のものは、底面と体部との接合面が鋭角であり、その稜線は底面端部と同一の高さである。478、479、481、482、486、489、490、800、2187、2189、2193、2195、2196が該当すると考えられる。なお、479、481、486、490、2196は、底面と体部との接合面がより鋭角的に作られた平底である。なお、780、803、817、823、2191、2192は、底部形態が不明である。

Ia類大型 ジョッキ形土器Ia類のうち、高さ15cm以上のものである。大型のジョッキ形土器の底部は、上げ底を呈し、体部中位の括れは不連続気味となるものが多い。これは上下の括れを形成する弧面間に筒部が加わることにより器高を増大させていくからであろう。小型、中型に比して内外面のハケメが、若干粗くなる傾向にある。なお、把手部分も大型化する。底部が上げ底のものは、底面と体部との接合面は丸みをもち、その屈曲部の稜線は底部と同程度の高さにくる場合が多い。底面は中心部に向かって3～5mm程上げ底と

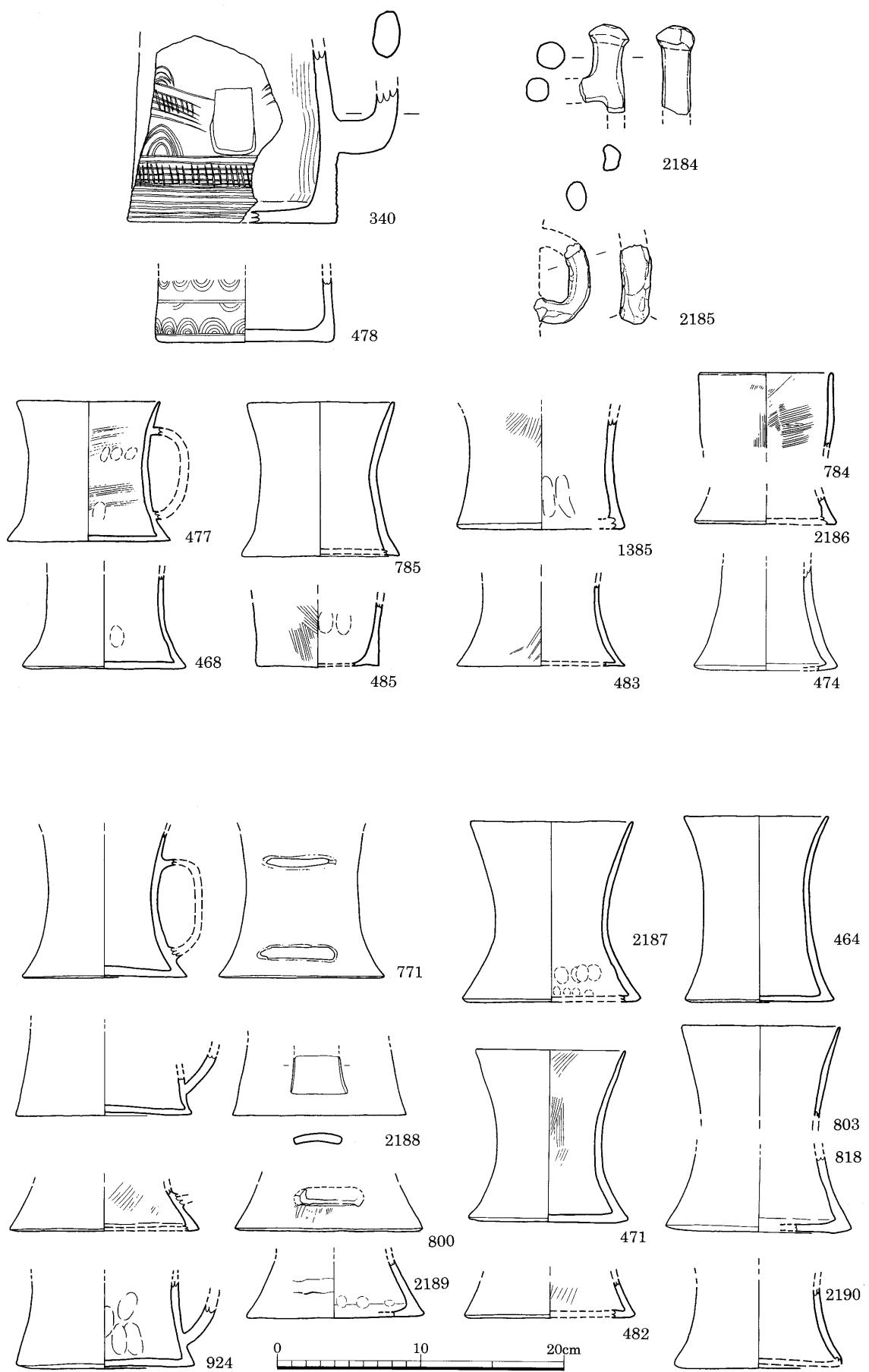


図 326 弥生土器実測図(ジョツキ形土器)

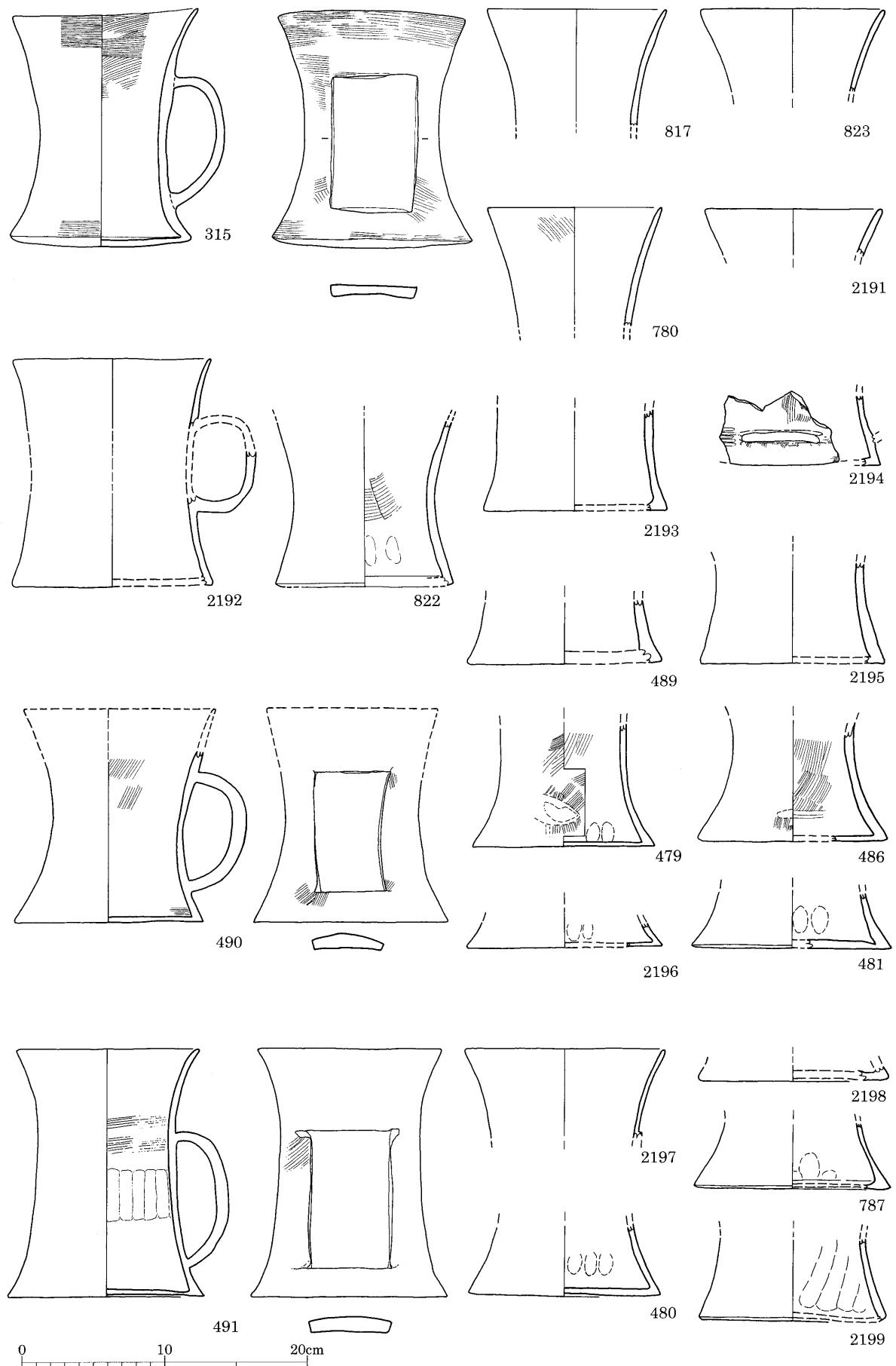


図 327 弥生土器実測図 (ジョッキ形土器)

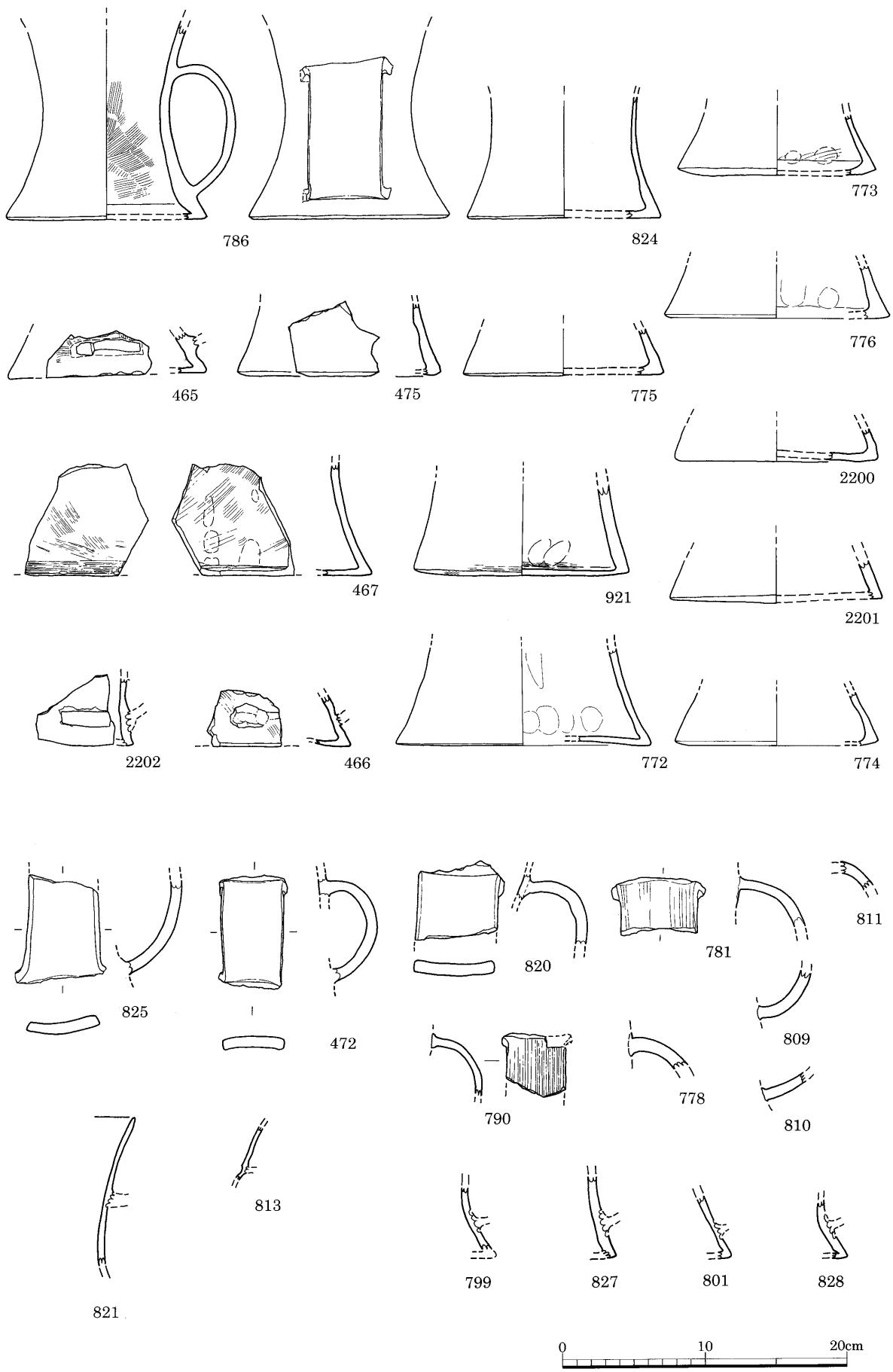


図328 弥生土器実測図(ジョッキ形土器)

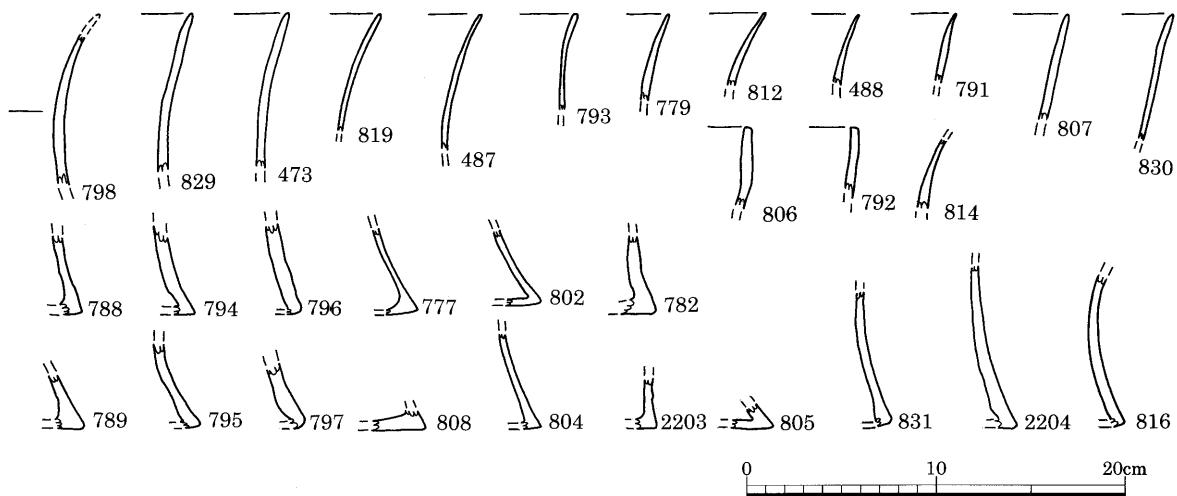


図 329 弥生土器実測図(ジョッキ形土器)

なり、中型上底と大差のない底上げである。466、475、480、491、772、787、2198、2199、2200が該当する。底部が平底のものは340、465、467、775、786、824であり、底部が丸底のものは773、774、776、921であると考えられる。しかし、底部中心部付近が欠失している場合、両者の分類は困難である。

I a 類その他 472、473、487、488、777～779、781、782、788～799、801、802、804～814、816、819～821、825、827～831、2184、2185、2203、2204は、胎土、調整、色調、焼成等から I a 類に分類される。しかし、法量、底部形態ともに不明なため、細分することができない。

2-2 II 類

陣笠状の柱頭をもつ把手を有するジョッキ形土器である。

I 類と比して、胎土は精製の度合いが低く、色調は赤褐色を呈する。II 類は確実な例が 1 点、胎土及び造りから II 類とした例が 2 点、合計 3 点が出土している。

2184 は陣笠状の柱頭部を含む把手片である。陣笠状柱頭部の断面は円形を呈するが、柱頭部を除く把手の断面は隅丸方形を呈する。SB243 から出土した。

II c 類 陣笠状の柱頭をもつ把手を有し、重弧紋を施すジョッキ形土器である。胎土は精製されておらず若干の砂粒を含み、色調は赤褐色を呈し、造りも厚手となる。II 類と I 類が最も異なる点は、内面の体部と底部が接合する面の形状であ

る。I 類の体部と底部が鋭角に接合することに対して、II 類の体部と底部は直角に接合し、接合面は曲面を描いている。なお、把手の上部を含まない 2 点を II c 類に分類しているが、これらは陣笠状の柱頭をもたずに III 類となる可能性を有している。340 は SB94 から出土し、把手の下部を含む体部下半の資料である。体部に下方から横位沈線紋、横位沈線紋に縦位沈線紋を加えた紋様、重弧紋、横位沈線紋に縦位沈線紋を加えた紋様、重弧紋が籠描にて施される。上部の横位沈線紋に縦位沈線紋を加えた紋様が斜行しているが、これは把手の接合部分に接しているためであり、欠失部分は水平に描かれていると考えられる。把手の断面は概ね隅丸方形を呈しており、器壁も I 類に比して厚い。全体的に厚手の造りとしてよい。なお、底部は平底である。器高は 15cm 以上と推測され、大型に分類できよう。478 は SB222 から出土した体部下半の資料である。体部下方から横位沈線紋、上向きの重弧紋、間隔が大きい下向きの重弧紋、横位沈線紋、下向きの重弧紋が籠描にて施される。体部と底部の接合部は、やや丸みを帯び、I 類のようなシャープさに欠ける。器壁は I 類に比してやや厚手である。底径は 340 に比して小さく、器高 10cm 以上 15cm 以下の中型に分類できよう。

2-3 III 類

断面円形の把手を有するジョッキ形土器である。

I 類と比して、胎土は精製の度合いが低く、色調は赤褐色を呈する。III 類は SB212 から 1 点出土した。

2185 は把手片である。断面は円形を呈し、把手内

時期	I a	II	III	合計
I	8			8
II	6			6
III	6	1		7
IV	16	1	1	18
V	3			3
VI	4			4
VII	2			2
合計	45	2	1	48

表7 ジョッキ形土器の時期的分布

側は概ね隅丸方形を呈し、把手の外側は半円形に形作られている。把手部分のみの出土であるが、当該期における他の土器形式には同様の把手又は耳を備える形式がないため、ジョッキ形土器と認定した。また、II類の陣笠状柱頭部は把手外側と直線的に連結するので、本資料はII類とすることはできない。以上から、III類に分類した。

3 ジョッキ形土器の分析

二子塚遺跡から出土したジョッキ形土器は、完形品、破片を合わせて108個体である。これらの資料については、土器の胎土、調整、出土地点等を勘案し、個体識別を実施した。以下では、完形品、破片の別を問わず、1資料1個体として、二子塚遺跡におけるジョッキ形土器の特徴を述べることとした。

3-1 形式学的分析

二子塚遺跡から出土したジョッキ形土器108個体は、I a類104個体、II類3個体、III類1個体に分類することができる。このうち出土遺構の時期を特定することができるジョッキ形土器は、住居址出土の48個体(44%)であり、I類45個体、II類2個体、III類1個体である。

各類の時期的推移

I類は、I段階からVII段階までの全時期に分布する。II類はIII段階及びIV段階に、III類はIV段階に分布する。

I類は、最も多数かつ、全時期にわたって分布していることが、最大の特徴である。その出土総数は104個体で、うち单一時期に比定できるジョッキ形土器は45個体である。時期別の分布をみると、IV段階の16個体(36%)を頂点とした単峰性の分布をとり、I段階～III段階の出土量は20個体(44%)で、V段階～VII段階の出土量9個体(20%)の概ね2倍となっている。ジョッキ形土器は資料数に乏しいことから、各段階を最頻値のIV段階とその前後の時期とに大別し I段階～III段階を前期、IV段階を中期、V段階

時期	遺構名	個体数	時期	遺構名	個体数
I	SB2	2	IV	SB65	2
	SB13	1		SB170	2
	SB20	3		SB202	1
	SB73	1		SB205	2
	SB192	1		SB212	1
II	SB18	1		SB221	2
	SB19	1		SB243	2
	SB129	1		SB246	3
	SB199	2	V	SB105	1
	SB264	1		SB190	1
III	SB22	3		SB242	1
	SB25	1	VI	SB6	1
	SB111	1		SB206	3
	SB222	2	VII	SB103	1
IV	SB9	1		SB198	1
	SB16	2			
				合計	48

表8 ジョッキ形土器の出土地点一覧 (SB)

～VII段階を後期とした時期的分布も記すこととする。

I類の法量による分類では、小型9個体(9%)、中型28個体(27%)、大型21個体(20%)、不明46個体(44%)との組成を示す。時期別の分布は、小型と大型のジョッキ形土器は主にIV段階以前の時期に分布し、中型のジョッキ形土器は概ね全段階に分布するが、なかでもIV段階とI段階に多く分布する。大別した時期区分においては、小型は前期と中期の個体数が等しく(各2個体)、後期は1個体のみとなる。中型は前期と中期の個体数が等しく(各6個体)、後期はその半数(3個体)となる。大型は前期(7個体)、中期(5個体)、後期(2個体)と、前期から後期にかけて個体数が漸減する。

I類の底部形状による分類では、上底17個体(16%)、平底32個体(31%)、丸底15個体(14%)、不明40個体(38%)との組成を示す。時期別の分布は、上底、平底、丸底のいずれもが概ね全段階に分布するが、なかでもIV段階に多く分布する。大別した時期区分においては、上底は前期と中期の個体数が等しく(各4個体)、後期は1個体のみとなる。平底は前期と中期の個体数が等しく(各4個体)、後期に若干個体数を減ずる(3個体)。丸底は前期と中期の個体数が等しく(各4個体)、後期はその半数(2個体)となる。

II類及びIII類は、ジョッキ形土器108個体のうちの4個体(3%)と極少数である。また、II類及びIII類は、共に出土個体数が最も多いIV段階に分布し、その直前(III段階)にもII類が分布している。

ジョッキ形土器の変遷

ジョッキ形土器は、I類が大多数を占め、二子塚遺

分類		時期							合計
法量	底部	I	II	III	IV	V	VI	VII	
小	平底	1		1	1				3
	丸底				1				1
中	上底	1		1	2				4
	平底	1			1	1			3
	丸底		1		1				2
	不明	2			2			1	5
大	上底	2			2	1			5
	平底		1		2				3
	丸底		1		1			1	3
	不明		1	2					3
不明	上底								0
	平底					1	1		2
	丸底		1				1		2
	不明	1	1	2	3		2		9
合計		8	6	6	16	3	4	2	45

表9 ジョッキ形土器 I a 類の時期的分布

跡の全時期にわたり分布する。最も出土数が増えるのはIV段階であり、最盛期と捉えることができる。I段階～III段階を前期、IV段階を中期、V段階～VII段階を後期とした場合には、ジョッキ形土器は前期から後期にかけて漸減する。特に、後期の出土数は中期の約半数にまで減少する。

II類とIII類は、極少数の出土であり、ジョッキ形土器の最盛期であるIV段階と、その直前（3期）に分布する。このことから、ジョッキ形土器は、最盛期に例外的な個体を極少数生成した、とすることができよう。

法量による分類では、小型のジョッキ形土器は1割弱の出土量で、前期から中期までは同数の出土数を示し、後期には消失する。中型と大型は、前期から中期まではほぼ同数の出土数を示しながら、後期には約半数の出土数にまで減少する。

底部形状による分類では、前期から中期までは、上底、平底、丸底が同程度分布するが、後期には上底が数を著しく減少させる。後期における平底と丸底の比率に大きな変化は認められない。

以上から、ジョッキ形土器は二子塚遺跡の全時期に分布するものの、後期にはいくつかの類型が消滅し、出土数も減少することが判明する。このことは、ジョッキ形土器がI段階以前に既に成立していること、及びVII段階以後、VII段階に近い時期に消滅することを示唆しているものと考える。

3-2 層位学的分析

発掘調査に際しては、時間的掣肘から土器を層位学的に取り上げる措置を十分にとることができなかつた。このため、各遺構を単位として相互の切り合い関係から層位学的な分析を行う。

ジョッキ形土器が出土した遺構は、住居址（SB）41軒、環壕（SV）1条である。各住居址からは合計59個体、最大3個体が出土し、条溝からは合計47個体が出土している。この他、包含層出土1個体、出土地点情報を逸失したもの1個体である。なお、出土遺構の時期を特定することができるジョッキ形土器は、31軒の住居址から出土した48個体（44%）である。

住居址（SB）

ジョッキ形土器を出土した住居址のI段階からVII段階までの分布は、IV段階（10軒）を最頻値とした、概ね单峰性の分布を示している。出現比率では、I段階（36%）からVI段階（7%）まで、時期を下るにつれ漸減している。なお、出現率が極端に高いVII段階（29%）は、当該期の母数が少ない（7軒）ことに原因が存在する可能性が高い。

各段階を最頻値のIV段階とその前後の時期とに大別しI段階～III段階を前期、IV段階を中期、V段階～VII段階を後期とすると、前期から後期にかけて出土軒数が漸減し、後期は前期の半数にまで減少する。この分布状況は、ジョッキ形土器の個体数における時期分布と同じである。

各住居からの出土個体数は最大3個体であり、ジョッキ形土器が特定遺構に集中して出土しているわけではないことを示している。

以上からは、I段階からVII段階までの全時期をつうじてジョッキ形土器が存在し、かつ、時期を経るごとに出現比率が低下すること、また、特定住居址への集積が認められないことが指摘できる。

環壕（SV）

二子塚遺跡には条溝が1条存在するが、条溝からの出土土器の資料化は不十分な状況である。このため、時期別の検討を行うことが困難であり、出土地点によ

時期	出土軒数	総軒数	比率	個体数
I	5	14	36%	8
II	5	20	25%	6
III	4	28	14%	7
IV	10	55	18%	18
V	3	17	18%	3
VI	2	27	7%	4
VII	2	7	29%	2
合計	31	168	18%	48

表 10 ジョッキ形土器出土住居址の時期的分布

る出土量の比較に止めざるを得ない。なお、条溝の発掘単位については、免田式土器の項目を参照されたい。

ジョッキ形土器の出土量は、発掘単位あたりでは 21 列と G 行が各 8 個体と最も多く、次いで 22 列が 6 個体である。連接する 2 発掘単位あたりでは、21 列から 22 列までが 14 個体と最も多い。ジョッキ形土器が多量に出土した発掘単位が連接する例は、この地点以外には認められない。発掘単位あたりで最も出土量が少いのは、2 列、19 列、20 列、23 列、24 列、25 列、H 行、I 行、L 行であり、いずれもジョッキ形土器を出土していない。これらジョッキ形土器を出土しない地点は、集落の入り口、条溝の直角屈折部(H 行、I 行)に該当する。

したがって、ジョッキ形土器は、条溝内の 1 地点(21 列～22 列)に集積すること、条溝内では断続的な分布を示すが、集落の入り口、条溝の直角屈折部には分布しないことを指摘することができる。

集落

以上から集落内におけるジョッキ形土器の出土状況をまとめると、以下のとおりとなる。なお、ジョッキ形土器が出土した遺構は住居と条溝に限られ、墓葬等、他の遺構からは出土していない。

第 1 は、ジョッキ形土器の出土状況においては、住居と条溝とは関連しないことである。ジョッキ形土器の条溝内の分布密度と、その周辺の住居における出土量とはまったく関連性が認められないため、住居から条溝への流入、条溝から住居への流入、住居から直近の条溝(部分)への廃棄等、遺構間にまたがった遺物の移動は出土状況からは看取し得ない。したがって、ジョッキ形土器は、遺構の種別に応じた廃棄の契機を

地点	個数	地点	個数
1b	1	8b	2
2a	1	9a	4
2b	2	10b	8
3a	3	11a	6
3b	3	13a	1
4a	1	13b	8
5a	4	15a	1
5b	1	15b	1
		合計	47

表 11 ジョッキ形土器の出土地点一覧 (SV)

考える必要がある。

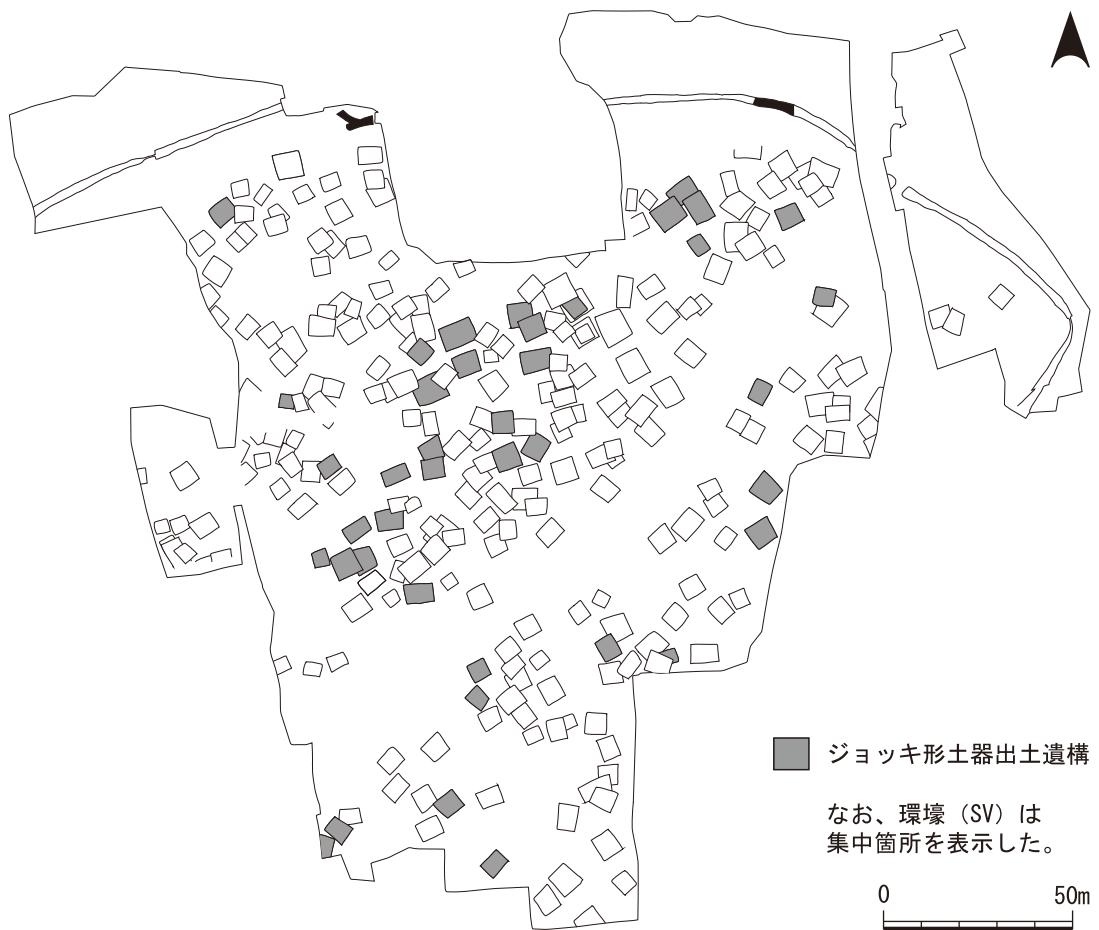
第 2 は、ジョッキ形土器を出土した住居が、集落内の道路の縁辺部に列状に分布することである。集落内には入り口から南北方向に遺構の空白地帯が連続し、これを道路として理解している。そして、この道路の南北にジョッキ形土器を出土した住居址が並んでいる。道路の南側は少なく、北側に多く分布する特徴は、集落の中心部が道路の北側に位置することによるものであろう。

4 ジョッキ形土器の構造

二子塚遺跡におけるジョッキ形土器は、全時期に分布するものの、いくつかの類型が中途消滅し、出土数も減少すること、時期を経るごとに出現比率が低下することを述べた。このことはジョッキ形土器の消長を表し、二子塚遺跡の IV 段階を最盛期として、以後、ジョッキ形土器が漸減し、VII 段階以後、それも VII 段階に近い時期に消滅することを示唆している。

このことは、従来のジョッキ形土器の年代観に若干の疑義を挟む結果である。少なくとも二子塚遺跡において、ジョッキ形土器は弥生時代後期前半には成立し、弥生時代後期後半に消滅する様相を呈しており、既往の年代観より早く成立し消滅する可能性が高い。

次に、ジョッキ形土器の集落における分布状態についてジョッキ形土器は集落内道路の縁辺部に列状に分布することを述べた。これは既往調査では判明していなかった事項である。集落の形状別分類では、家屋が道路に沿って列状に分布している例を路村と規定し、開拓地等にみられるものとしている。二子塚遺跡は環壕集落であるが、ジョッキ形土器を出土した住居址は、



[引用文献]

梅原末治 1958「肥後菊地郡のコップ形土器」『人類